

テント一週一文 (ひ) —— エネルギー政策と市民

(承前)

行政は全く民意を無視している——パブコメ談義

天神で行われる憲法記念日講演会のチラシを読み終わった若い男性（以下「若」）は、「入口」と書いた透明ビニールシートを押して外に出て行こうとしています。『天恵の海』を読んでいた自さん（自転車でテントに来る人）は、それを見て、急いで「有り難う。これ面白かったです」と『天恵の海』を彼に返ししながら、呼びかけます。

若：いえいえ、どういたしまして。私は、ただそれを持ってきてだけの運び屋ですから。

自：情報を運んでくれたわけですから、やはり有り難うですよ。それはそうと若さん。

若：ハイ。

自：パブコメってご存知でしょう。いま福岡市がですね……

若：パブリックコメントはガス抜きに過ぎないので、私は、パブコメはしないのですよ。

自：これはまた厳しいですね。このテントに来る方でパブコメを出したって言う方は結構いますよ。

若：私も以前数回出したことがあります。しかし、今は信用していません。というのも、「環境と原子力の話」というウェブページがありましてですね、その「日本消費者連盟関西グループ発行『草の根だより』2017年1月号掲載記事に加筆」と題されたページがあります。

☆参照 <http://ksueda.eco.coocan.jp/kusanone1612.html>

そこに、次のようなことが書かれていました。

総合資源エネルギー調査会の「電力システム改革貫徹のため政策小委員会」が、中間とりまとめ案のパブコメを募集したそうなのです。パブコメの期限は2017年1月17日。ところが、その前年の2016年12月20日の閣議決定で、すでに中間とりまとめ案の内容が書き込まれていたそうなのですよ。

自：ひどい話ですね。

若：ひどいでしょう。行政は、国民の意見を尊重する意志をこれっぽっちも持っていないのですよ。

自：「これっぽっち」ってどれくらいですか。

若：0.000001立方センチメートルです。

自：フ～ン。でも、「行政は」って、行政をすべて一括りにして論ずるのも少し乱暴じゃないですか。

若：それもそうですね。このページの作成者も「なんのためのパブコメなのか、ルール違反も甚だしいゆゆしき事態」と怒ってはいるのですが、「パブコメはガス抜きに過ぎず、無意味だ」とまで主張しているわけではありませんからね。

私自身は、このウェブページを見て、原子力に関するパブコメの内容や文章を考えるのがイヤになったというだけのことですけど。

自：それならまして、パブコメ受信者である市や町や国や県ですね、それらへ、シッカリと取り扱うように言わなければならないのですよ。あなたが。

若：エッ私が？ 私はエピキュリアンなので、あまりこぶしは振り上げないのですよ。

自：難しい単語を使って無学な私を煙に巻かないでくださいね。エピキュリアンって自己正当化主義者ってこと？

若：そういう意味じゃないのですが、一旦「や～めた！」と思ったら、なかなかリチャージ出来ないのですよ、年取ってくるよ。

自：年取ってくるよって、まだ若いじゃないですか、あなたは。それに、エピキュリアンってお年寄りってどういう意味？

若：いやいや。エピキュリアンは撤回します。「自分はエピキュリアン」は、撤回しますが、行政への不信は撤回しませんよ。

行政は全く民意を無視している——松下竜一さんの体験

自：アラアラ。それはまたどうして？

若：いくつもの市民運動が、今まで煮え湯を飲まされてきた経験がそれを示していますよ。

自：市民運動の内容や主張は、身の回りの事柄よりも天下国家の動きへの批判である場合が多いから、勢い行政とは対立し易いね。

若：とは言いましても、ほとんどの市民運動は身の回りの事柄から出発しているのですが。身の回りの事柄が、政治や天下国家の動きに直結しているのですよ。

自：ほんとにそうでしたね。二項対立じゃないんだ。

若：二項対立？ 難しい単語を使って無学な私を煙に巻くお積りでしょう～。

自：フフフ。実はそうなのですよ。

若：急に思い出したのですが、身の回りのことと国の方針が直結していて、しかも行政の強権的対応に怒り心頭という本を、ついこの前読みましたよ。

自：それは、それは。

若：松下竜一さんという方の『明神の小さな海岸にて』（1975年 朝日新聞社）という本です。

自さんは何か思い出したように外に出て行って、テントの前で机を見栄えよく整えている女性（以下「机」さん）に、「以前何かの時に松下竜一さんという名前、出ていませんでしたかね？」と尋ねています。

机：出ていますよ。「テント一週一文（め）」です。どうかしたのですか？

☆参照 http://npg.boo.jp/kieyuku/week_repo/180416kuriyama.pdf

自：この若さんが、松下さんの本のことを急に言い出したんですよ。

若：この本のはじめの方 20 ページに、松下さんたちが豊前火力発電所建設に抗議して中央の電調審連絡会議に「住民の声を聞け！」と叫んで突入した時にですね、松下さんたちは、「呆然とした電源開発官の机上看たのは、「豊前火力に関しては、問題点を残したまま（電調審）にかけるのは問題であり、前例としない」というメモを見たそうなんです。このメモの意味するところは

「政府の基本方針も決まらぬ先に豊前火力建設計画を承認することは、土台がない

のに宙に建物を認可することであり、それはおかしいのではないかという環境庁からの問題提起が、開発偏重の経済企画庁、通産省のリードする会議で押し切られたというのがメモの真相であった」

というのです。

自：40年前は、そんなエネルギー溢れた市民運動があったのですね。ともあれ、中央ではすべてが主要官庁の意向で決められていた、というのですね。

机：水俣病などの公害問題も、1970年代には大きなテーマでしたから住民運動が活発でしたよね。ともあれ、昔通産省、今経産省ですね。

若：松下さんがこれを書いた70年代と、ウェブページで書かれている2017年の行政の姿勢は、残念ながら、エネルギー政策に関しては少しも変わっていません。市民の意見を、松下さんは「住民の声」をって言っていますが、今も昔も微塵も反映していないんですよ。

自：微塵ってどれくらい？

若：茶化さないでくださいよ。

自：いえね、そう言っている若さんは評論家的に見えたものですからね。松下さんの本を紹介している時には、一瞬、運動家のように見えたものですから。

若：同じ人間、私、なんですがね……

自：エネルギー官庁のパブコメ募集に対する若さんのご意見はわかりましたが、私が最初に言いましたのは福岡市のパブコメなんですよ。

若：判りました、判りました。

机：評論家的若さんの言い方にしたがつと原発政策も変りようがないんですかね……。でもですね、この前4月19日に、ここでテント7周年記念の九電抗議集会があったんですよ。その場で村長さんがした挨拶を原稿起こしして、そこの机の上に置いています。ご存知？

自+若：知りません。

机：これよ。ご覧になって。少し気持ちが和らぐわよ。

国民の意向を無視、蹂躪を続ける国家。7年間にわたって国のエネルギー政策を批判する運動を続ける「テントひろば」では幾分重苦しい気分の会話になりましたが、村長さんの九電糾弾挨拶を読み、本日もテントでの静かな時間が流れてゆきました。

(文責 栗山次郎)

2018年5月14日公開

参照：4月19日「九電本店前テントひろば」7周年記念九電弾劾行動での青柳行信
「テントひろば」世話人代表の挨拶

http://npg.boo.jp/kieyuku/week_repo/180514aoyagi.pdf